

# アレクサンドリアから東京まで： アート、植民地主義、そして絡み合う歴史

2020年12月3日 [木] – 12月4日 [金]  
オンライン配信、YouTube

開催・発表概要 - 第1日

本シンポジウムは、アートと植民地主義についての議論をさらに広げることを目指します。ポストコロニアル理論の台頭以降、ヨーロッパによる植民地主義と帝国主義の歴史は、現代美術館、学問領域、キュレーションの実践において度々議論されている重要なテーマです。しかしながら、非ヨーロッパ諸国による植民地支配と被支配者の経験に着目した芸術的な観点については、そうした経験に基づく複雑な創作や遺産が生成され続けているにもかかわらず、いまだ十分な研究がされておらず、さらに、それらを比較分析する試みもとりわけアートの領域にて進んでいないと言えるでしょう。本シンポジウムでは、北アフリカから東アジアにわたる植民地主義の多様な在り方が近代社会の形成に与えた影響に注目し、アートやアーティストに焦点をあてたケーススタディを通して、そこで浮き彫りになる未整理の歴史、記憶の構築、相反する複数のナラティブを検証します。

アートにおけるつながりまたは交流と、支配や不平等の仕組みが繋がり交差する領域は、第二次世界大戦と独立運動後の復興や国家再建という圧力にしばしば覆い隠されてきました。したがって、本シンポジウムでは、前衛芸術の国際的なネットワークと植民地的関係を構築した政治的ヒエラルキーは無関係だったと言えるのか否か、また植民地主義の再検証が、新しい断絶や排他的な傾向を生み出すことに結果的に繋がったという見方もあるなか、ヨーロッパ中心主義および国粋主義的な美術史の在り方に、それが実際にいかにわれわれの意識を喚起するのかを探るものでもあります。

新型コロナウイルスの世界的流行は、これまで表面化しなかった社会的・経済的不平等を露わにしました。本シンポジウムで現代社会を形成した植民地主義の歴史を批評的に考察することが、いま国際社会が直面する課題と向き合うためのヒントに繋がれば幸いです。

## 企画：

片岡真実（森美術館館長）、イ・スキョン（テート・モダン・インターナショナル・アート部門シニア・キュレーター、ヒュンダイ・テート・リサーチセンター・トランスナショナル）、デヴィカ・シン（テート・モダン・インターナショナル・アート部門キュレーター）、林 道郎（上智大学国際教養学部教授）、クリスチャン・クラヴァグナ（ウィーン美術アカデミー教授）

主催：森美術館、ヒュンダイ・テート・リサーチセンター・トランスナショナル

協力：上智大学 比較文化研究所

## 第1日：12月3日（木）

18:00 - 18:05 [東京] / 9:00 - 9:05 [ロンドン]

### オープニング・リマークス

片岡真実（森美術館館長）

## パネル1：ナショナリズムとコスモポリタニズムの間

18:05 - 19:30 [東京] / 9:05 - 10:30 [ロンドン]

### モデレーター

デヴィカ・シン（テート・モダン・インターナショナル・アート部門キュレーター）

### トボクラフィ 感覚の地勢図：身体、アーティスト・ネットワーク、そして大戦間期のバレエ・リュス

印南美沙子（ダラム大学現代言語文化学部准教授、日本語学科ディレクター）

小説家の横光利一は、1931年に発表した小説『上海』で、日本がアジアにおける相反する立場にあるなかで、グローブスクに拡大する日本帝国の国境を体現するものとして、個人の身体を描いている。同時期、ハルビン経由で上海に渡り、後に戦後の日本のバレエブームに貢献したダンサーの小牧正英は、上海バレエ・リュスのためにしばしばライセラム劇場で踊った。この劇場は、1930年にフランス租界に設立され、マーゴ・フォンテーヌなどの著名ダンサーが踊ったことで知られる。そういった踊る身体は、国家当局や代表部との関わりなど、植民地時代の国家感覚と切り離すことができないものであったが、国家を超えたアーティストのコラボレーション・ネットワークによって、劇場空間を具現化した。異文化間の相互作用やコラボレーションにおける身体化された実践の理解を深めるためのより大きなプロジェクトの一環として、ここでは、身体化された経験という考え方、特に地理的な境界を越えて転移・循環する場合のあり方を探り、小牧と上海バレエ・リュスに焦点を当てる。小牧の回想を中心に、感覚的な経験を通して既存の地勢図を書き換える可能性のある継続的な実践としての身体化を探求したい。

### 連結環としての日本伝統芸術：日本の国粋主義者とインドの反植民地革命家のネットワークについてのトランスナショナル分析

ヘレナ・チャプコヴァー（立命館大学グローバル教養学部美術史科准教授、早稲田大学国際教養学部客員講師）

日本が独自の植民地建設の足場をつくる際に、日本の領土内で、反植民地活動を隠蔽するために役立つ国境を越えたネットワークの精力的な活動や活動家の避難所が存在したことが最近の研究で明らかになった。その中には、日本での予期せぬ出会いをきっかけに、インド初のモダニズム建築であるボンディシェリのゴルコンデ宿舎（1935-1942年）という、並外れたコラボレーション・プロジェクトを実現させたアーティストたちがいた。

本論は、日本で始まりインドで発展したふたつの事例に光を当てることで、これまで関連づけられることのなかったふたつの植民地時代の物語を結びつけることを目的としている。日本の帝国主義に関連する汎アジア主義活動とインド独立のための闘争である。

フランス人の画家でオカルト主義者のミラ・リシャール（1878-1973年、後にボンディシェリの「マザー」となる）が国粋主義者集団「黒龍会」（1901年設立）の支援を受けて日本に滞在したこと（1916-1920年）から事例研究を進める。東京とボンディシェリのつながりは、その後、「我楽他宗」（1919-1940年）のメンバーの個人的ネットワークによって築かれた。この日本の伝統的な美術品コレクターのサークルは、珍しく外国人会員に開放されており、その結果、芸術めぐる国境を越えた出会いや、情報交換を促進する拠点となっていた。メンバーには、チェコ出身でアメリカに移住した建築家、アントニン・レーモンド（1888-1976年）とその妻ノエミ・レーモンド（1889-1980年）、インドの革命家ラス・ビハリ・ボース（1886-1945年）と通じていたジャーナリスト、ケシヨラム・サバルフルなどがいた。

この研究に用いた国境を越える方法は、それまで孤立して扱われていた歴史を、異なる物語、より適切に言えば地域史、

美術史の一部として解放することを可能にした。我楽他宗の歴史など、完全に無視されていたのである。

## インドのナショナリズムとスリランカ芸術における「近代」の形成

**サナタナン・タモタランピライ**（ジャフナ大学美術史シニア・レクチャラー、スリランカ現代美術・建築・デザインアーカイブ共同創設者）

スリランカの美術史の文献は、スリランカにおける近代美術の実践を西洋化の結果として描いている。しかし、物的資料、新聞記事、展覧会の歴史を見ると、インドとその独立運動が、イデオロギー的・美学的選択を通じて、スリランカの文化一般、とりわけ芸術実践のなかで、いかに西洋化の歩みに対抗する潮流となったかがわかる。つまり、1920年以降のイギリスの植民地文化から「新しい芸術」を生み出す力学は、インドの知性主義の影響に大きく支配されていたのである。インド国民会議派の指導者たちの訪問に加えて、ベンガル派やシャンティニケタンのアーティストたちの作品展は、都市を基盤とした地元の芸術活動に衝撃を与え、「新しい東洋の芸術」あるいは「国民的芸術」についての議論を切り開いた。この文脈において、ラビンドラナート・タゴールが1922年と1934年にスリランカを訪問したことは重要な意味を持っていた。セイロン・アート・クラブ（1921年）とスリパリー・カレッジ（1934年）がコロンボに、カラニヤム（1934年）がジャフナに設立されたことは、この流れの直接的な影響のひとつだった。その後、セイロン・アート・クラブのアーティストの多くは、写真家のライオネル・ウェントとともに「43年グループ」として知られる国内で最もカリスマ的なモダニズム芸術家集団を結成した。こういった展開により、ビクトリア朝のアカデミズムの理想に由来する既存の都市芸術に対するオルタナティブが形成された。一方、ベンガル派とは異なって、この時期のスリランカの芸術家グループは、島国的な偏狭さは薄く、より国際的な態度を見せていた。本論は、スリランカ芸術における「近代」の形成において、インドのナショナリズム運動が生んだ創造的な緊張を解き明かす。

## パネル2：冷戦、解放、モダニズム

20:00 - 21:30 [東京] / 11:00 - 12:30 [ロンドン]

### モデレーター

**クリスチャン・クラヴァグナ**（ウィーン美術アカデミー教授）

## 不可能な帝国：台湾のアートコレクションにおけるグローバル・サウス、冷戦、中華民国

**タカモリ・ノブオ**（キュレーター）

1949年、国共内戦で国民党が敗北し、旧日本の植民地であった台湾に退却すると、「不可能な帝国」がこの南国の島では政権を握るようになった。冷戦時代には「自由中国」とも呼ばれた中華民国（R.O.C.）は、その政治的・文化的影響力をグローバル・サウスに投影しようとした。東南アジアの中国人からアフリカ大陸への農業派遣団まで、中華民国は「超大国」としての精神を演じようとしたが、その現実には日本の近代芸術の伝統とともに、小さな島の地殻の中に閉じこもっていた。

本研究の実践として、2020年7月に台北市立美術館で「秘密の南方：美術館のコレクションにおける冷戦の視点からグローバル・サウスへ」展が開催された。台湾の公立美術館のコレクションの中から、グローバル・サウスに関連した200点近くの作品や記録文書を選び、戦後から現在に至るまで台湾/R.O.C.が果たしてきた独自の役割を紹介する展覧会だ。

展示作品は、1943年にルソン島の人々を描いた石原紫山の屏風画から、1950年代にタイで日本画の技法を用いて制作され郭雪湖（グオ・シュエフ）の風景画、1960年代にエンジニアとしてベトナム戦争に加わった劉其偉（リュウ・マックス）のスケッチまで、多岐にわたる。また、「華僑」政策の下で収集された東南アジアの中国人作家の作品も含まれる。

冷戦時代、島国の中華民国は大中華思想を掲げ、台北政府はその影響力を世界の中国人コミュニティに及ぼすことに努めた。その間、インドネシアの内戦に介入、タイ北部で情報部を設置、コンゴ民主共和国の独裁者のために中国風の宮殿を建設するなど、さまざまな軍事作戦や行動に参加しようと奮闘した。「不可能な帝国」の物語は、台湾における文化的植民地化政策とそれが世界に及ぼした影響に関する言説でもある。

## エジプトにおけるアート界の変化と非同盟運動

ナディア・ラドワン（ベルン大学美術史研究所世界美術史准教授）

非同盟運動によって生み出された政治的想像力が、戦後エジプトの美術と展覧会の実践に与えた影響を検証する。バンドン会議後の時期に焦点を当てることで、エジプト、インド、メキシコ、ユーゴスラビアの間に新しく生まれた同盟関係の芸術的側面と、それらが芸術的アプローチと文化政策に及ぼした影響を問う。また、アジア・アフリカ諸国の連帯に関するナセル主義のイデオロギーが、アート・ビエンナーレのような文化国家プロジェクトによってどのように生成されたのかを探求する。たとえば、アレクサンドリア・ビエンナーレは、新たな勢力地図を再構成し、反帝国主義の言説を勢いづける上で、どのような役割を果たしたのだろうか。その観点から、エジプト近代美術グループに所属するアーティストが生み出した社会的リアリズムの潜勢力についても詳細に見ていきたい。「革命的芸術」の多様な解釈は、解放についての知識をどのように与えてくれるのだろうか。平和、飢餓、貧困、アフリカ、スエズ運河の国有化といった新しいテーマの表現は、反植民地闘争のメタファーとして、国家のプロパガンダの手段として、あるいは芸術的な自由と解放のための手段として機能したのだろうか。全体として、この発表の目的は、再想像された国家的・国際的アイデンティティが、冷戦の文脈において、いかにエジプト・モダニズムの構成要素となっていたかを問うことである。

## 仮想の連帯：植民地独立後の北アフリカにおける進歩的リアリズム芸術を求める闘争へのソビエト

### の関与

マリア・ミレーバ（コートルド美術研究所アソシエイト・レクチャーラー）

本論では、北アフリカ文化における脱植民地化と社会主義の影響との関係性を解きほぐすことを目的として、アーティスト、美術学校、展覧会間の接点を検証する。芸術的に西洋モダニズムに依存していた時期を経て、ソビエト連邦は、新たに解放された国家に非資本主義、反帝国主義の創造性モデルを提供した。それは美学的公式を規定するのではなく、地域の伝統と密接に結びついた新しい国家芸術の発展を奨励するものだった。

ソビエトとアフリカの関係性と社会主義的国際主義という見地から、近代の北アフリカの芸術を考察する。エジプト人アーティストのハメド・オワイス、インジ・アフラトーン、そして1957年の国際青年祭で金賞を受賞した彫刻家ジャマル・エル・サジニの作品を例に、ポストコロニアルの北アフリカにおける新しい芸術的アイデンティティの構築とソ連との関係性を探っていく。1961年にエジプトが非同盟運動に参加したことは、この地域におけるソビエトの支配的立場を利用したものを見なすことができるだろう。

## ロシア語化プロジェクト

ゼイガム・アジゾフ（アーティスト、哲学者）

植民地支配としての「ロシア語化」の問題に取り組む。ロシア語化とは、ロシア帝国と後のソビエト連邦がどのようにしてロシア語を使って旧植民地を支配したかを説明する用語であり、後にこれらの地域は、ソビエト政権下で衛星社会主義共和国として結末が図られた。1991年のソビエト連邦崩壊後、いくつかの国で「脱ロシア語化」政策が進むなかにおいても、ロシア語化のプロセスは継続しており、消滅の兆しすら見せていない。本研究は、この現象を考察対象として扱い、さらに芸術的・哲学的な観点から批評的修正を行うことで理解を促し、いくつかの洞察を見出そうとする。その目的は、あるプロセスの終わりがどのように別のプロセスの始まりをもたらすのかを示すことだ。ロシア語化のプロセスは、帝国の影響力を拡大するための政治的プロジェクトとして存在した。そして、ソビエト連邦崩壊後もメディアなどでの言説としてそのような状態が続いている。自身のアート作品と、調査研究や自伝的資料をもとに執筆した批評的エッセイについて、スライドと短編映画を交えて語る。

# From Alexandria to Tokyo: Art, Colonialism and Entangled Histories?

2020.12.3 [Thu] - 12.4 [Fri]

Online event, YouTube

Abstracts – DAY 1

The symposium aims to decenter present-day debates on art and colonialism. While European colonialism and imperialism have become important themes in contemporary museum, academic discourse and exhibition practice, artistic perspectives on non-European colonialism and experiences of domination remain relatively understudied. This is so despite the complex creations and legacies these experiences have and continue to generate. Moreover, little comparative analysis has been done in this regard, especially as pertaining to art. The symposium therefore aims to shed light on the multiplicity of colonialism spanning from North Africa to East Asia and their roles in the constitution of the modern world. In particular, it seeks to explore art- and artist-focused case studies that examine undisciplined histories, memory building and the conflicting, multivalent narratives these have generated.

The pressures of postwar and post-independence reconstructions and nation-building have long concealed the complex and contested relationships between artistic connections or exchanges, and the workings of domination and inequality. The symposium will thus question whether the formation of avant-garde artistic networks connected at an international level can be separated from the hierarchical conditions under which colonial connections were formed. Second, it will assess how the reevaluation of colonialism raises a challenge as much to Eurocentric art histories as to nationalist ones, which have arguably contributed in drawing new separatist and exclusionary lines.

The outbreak of the new coronavirus has further exposed the socio-economic inequalities that are felt along various aspects around the world. By engaging critically with the histories of colonialism, which have undoubtedly impacted the current development, we hope that this symposium will lead us to a better understanding of the challenges we collectively face today.

## **Convenors:**

Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum), Sook-Kyung Lee (Senior Curator, International Art, Hyundai Tate Research Centre: Transnational, Tate), Devika Singh (Curator, International Art, Tate), Hayashi Michio (Professor, Sophia University), Christian Kravagna (Professor, Academy of Fine Arts Vienna)

*This event is organized by Mori Art Museum and Hyundai Tate Research Centre: Transnational in partnership with Institute of Comparative Culture, Sophia University.*

## DAY 1: Thursday, December 3, 2020

18:00 - 18:05 (Tokyo) / 9:00 - 9:05 (London)

### Opening Remarks

Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum)

## Panel 1: Between Nationalism and Cosmopolitanism

18:05 - 19:30 (Tokyo) / 9:05 - 10:30 (London)

### Moderator:

Devika Singh (Curator, International Art, Tate)

### Sensory Topography: Bodies, Artist Networks, and the Interwar Ballet Russes

Fusako Inami (Assistant Professor at School of Modern Languages and Cultures, Director of Research at Durham University)

In *Shanghai* (1931) by the Japanese writer Yokomitsu Riichi, the individual body is depicted as a literal embodiment of the grotesquely expanding borders of the Japanese empire amid its ambivalent position within Asia. Around the same period, Japanese dancer Komaki Masahide, who had arrived in Shanghai via Harbin and later contributed to the postwar ballet boom in Japan, danced for the Shanghai Ballet Russes, often at the Lyceum Theatre. This venue was founded in 1930 in the French concession area of international settlement, where prominent figures, such as Margot Fonteyn, danced. While those individual dancing bodies were inseparable from the colonial sense of the nation, including their involvement with national officials and representations, they embodied the theatrical space through their collaborative artist networks beyond the nation. As part of a larger project to develop an understanding of embodied practices in cross-cultural interactions and collaborations, this paper explores the idea of the embodied experience, particularly when transferred and circulated across geographical boundaries, and focuses on Komaki and the Shanghai Ballet Russes. With an emphasis on Komaki's memoirs, this paper aims to explore embodiment as a continuous practice to potentially rewrite the existing topography through sensory experiences.

### Japanese Traditional Arts as the Connecting Link. Transnational Analysis of the Network of Japanese Ultrationalists and Indian Anti-Colonial Revolutionaries

Helena Čapková (Associate Professor in Art History at Ritsumeikan University, Visiting Lecturer at Waseda University)

Under the scaffolding of Japan's own colonial construction, recent research uncovered an energetic operation of transnational networking that served to conceal anti-colonial activities within Japanese territory, calling it a refuge for the activists. Among them were artists whose unexpected encounter in Japan led to some extraordinary collaborative projects, such as the Golconde dormitory in Pondicherry (1935 -1942) – the first modernist building in India. This paper aims to shed light on two interconnected case studies that commenced in Japan but developed in India, and thus link two colonial narratives that are rarely associated with one another: Japanese imperialism and related Pan-Asianist activities and the struggle for Indian independence. The case studies will develop from the Japanese stay (1916-1920) of French painter and occultist, Mirra Richard (1878-1973, later the Mother of Pondicherry) under the auspices of the ultrationalist group, the Black Dragon Society (founded in 1901). The connection between Tokyo and Pondicherry was subsequently built upon personal networking among the members of Garakutashu (1919-1940). This circle of collectors practicing traditional Japanese arts was unusually open to foreign members and as such became a hub fostering transnational encounters in arts and possibly, intelligence exchange. The members included Czech/American designers Antonin (1888–1976) and Noémi Raymond (1889–1980) and Keshoram Sabarwal, a journalist associated with Indian revolutionary *Rash Behari* Bose (1886-1945). Transnational methods used for this research allow for a disentangling of histories that were otherwise treated in isolation, as parts of different, even local, historical and art historical narratives. Some, such as the history of Garakutashu, were entirely marginalized.

## **Indian Nationalism and the Making of 'Modern' in Sri Lankan Art**

**Sanathanan Thamothersampillai** (Senior Lecturer in Art History at University of Jaffna, Co-Founder of Sri Lanka Archive for Contemporary Art, Architecture, and Design)

The written art history of Sri Lanka maps modernist art practices in Sri Lanka as a consequence of westernization. But the material evidence, newspaper accounts and exhibition histories reveal how through ideological and aesthetic choices, India and its freedom movement became a counter current to the westernizing threads in Sri Lankan culture in general and art practices in particular. Hence, the mechanics of churning out a 'new art' from British colonial culture after 1920, was largely governed by the influence of Indian intellectualism. Apart from the visits by the Indian National Congress leaders, exhibitions of works by artists of the Bengal school and Santiniketan had electrified the city-based local art practices and opened up debates on 'new eastern art' or 'national art'. In this context, Rabindranath Tagore's visits to Sri Lanka in 1922 and 1934 were crucial. One of the direct impacts of this current was the formation of the Ceylon Art Club (1921) and Sri Palee College (1934) in Colombo, and Kala Nilayam (1934) in Jaffna. Later, many of the Ceylon Art Club artists joined photographer Lionel Wendt in the formation of the country's most charismatic modernist art collective known as '43 group.' These developments formed an alternative to existing urban art derived from the ideals of Victorian academicism. Meanwhile, unlike the Bengal school, artist groups in Sri Lanka in this period displayed less insular and more cosmopolitan attitudes. This paper attempts to unpack the creative tension that was produced by the Indian Nationalist movement in the making of 'modern' in Sri Lanka art.

## **Panel 2: The Cold War, Liberation and Modernism**

20:00 - 21:30 (Tokyo) / 11:00 - 12:30 (London)

### **Moderator:**

**Christian Kravagna** (Professor, Academy of Fine Arts Vienna)

### **The Impossible Empire: the Global South, the Cold War, and the Republic of China in the Taiwanese Art Collection**

**Nobuo Takamori** (Curator)

In 1949, when the Kuomintang Party retreated to Taiwan (officially the Republic of China, R.O.C), a former Japanese Colony, following the Chinese Civil War, an 'Impossible Empire' began ruling over this tropical island. The R.O.C., also known as "Free China" during the Cold War, tried to project its political and cultural influences on the Global South. From Southeast Asia's Chinese communities, to R.O.C.'s agricultural missions on the African continent, the Taipei government tried to project an image of itself as a "superpower". In addition, the R.O.C. government still maintained a seat as a permanent member of the U.N. until 1971 representing China. This was so despite the geo-body of R.O.C. actually being a tropical island relying on and connected with Japanese colonial modernization. As part of the practice of this research, the exhibition *The Secret South: from Cold War Perspective to Global South in Museum Collection* was unveiled at the Taipei Fine Arts Museum in July 2020. Nearly 200 artworks and documents pertaining to the Global South were selected from the collections of several public art museums in Taiwan to present the unique role Taiwan/R.O.C. has been playing since the end of the war. The exhibits ranged from Ishihara Shisan's screen painting, which depicts the people on Luzon Island in 1943, together with the Kuo Hsue-Hu's landscape works created with the technique of *nihonga* in Thailand in the 1950s, to sketches by Max Liu, who joined the Vietnam War as an engineer in the 1960s. In addition, the exhibits included artworks by Chinese Southeast Asian artists collected under the 'Overseas Compatriot' policies. During the Cold War, the island nation of R.O.C. upheld the Greater China ideology, and the Taipei Government endeavoured to project its influence on Chinese communities globally. Meanwhile, it made strenuous efforts to partake in various military campaigns and actions, intervening in the civil war of Indonesia, setting up intelligence headquarters in northern Thailand, and building a Chinese-style palace for the dictator of the Democratic Republic of Congo. The story of the 'Impossible Empire' is deeply connected to its cultural colonialism in Taiwan and the projection of its influence worldwide.

### **Shifting Art Constellations and the Non-Aligned Movement in Egypt**

**Nadia Radwan** (Assistant Professor of World Art History, Institute of Art History, University of Bern)

This contribution examines the effects of the political imaginaries generated by the Non-Aligned movement on art and exhibition practices in postwar Egypt. By focusing on the aftermath of the Bandung Conference, it questions the artistic dimensions of new alliances between Egypt, India, Mexico and Yugoslavia, and their repercussions on artistic approaches and cultural policies. It proposes to investigate how Nasserist ideologies regarding Afro-Asian solidarities were generated by cultural state projects, such as art biennales. For instance, what role did the Alexandria Biennale play in reconfiguring new geographies of power and in activating anti-imperialist discourses? In that perspective, it also suggests to take a closer look at the potentialities of social realism produced by artists belonging to the Egyptian Group of Modern Art. How can the multiple translations of a “revolutionary art” inform us about emancipation? Did the representations of new topics, such as peace, hunger, poverty, Africa or the nationalization of the Suez Canal operate as metaphors of anti-colonial struggle, as instruments of state propaganda or as a means towards artistic freedom and liberation? Overall, this contribution aims to interrogate how reimagined identities as both national and transnational were constitutive of Egyptian modernism in the context of the Cold War.

### **Imagined Solidarities: Soviet Involvement in the Struggle for Progressive Realist Art in Postcolonial North Africa**

**Maria Mileeva** (Associate Lecturer at the Courtauld Institute of Art)

This paper examines contacts between artists, art schools, and exhibitions, with the aim of disentangling the relationship between decolonisation and the influence of socialism in North African culture. Following a period of artistic dependency on Western modernism, the Soviet Union provided a non-capitalist and anti-imperialist model of creativity for newly liberated states. It did not prescribe an aesthetic formula, but encouraged the development of a new national art, which was closely tied to local traditions. This paper examines modern North African art through the prism of Soviet-African relations and socialist internationalism. The work of Egyptian artists Hamed Owais, Inji Aflatoun, and the sculptor Gamal El Sagini, who received a gold medal at the 1957 International Festival of Youth, will be used to explore the construction of new artistic identities in postcolonial North Africa and their relationship with the USSR. It will argue that Egypt’s joining of the Non-Aligned Movement in 1961, can be seen as a way of leveraging Soviet position of dominance in the region.

### **Russification Project**

**Zeigam Azizov** (Artist, Philosopher)

Zeigam Azizov’s contribution explores the question of Russification as colonial domination. Russification refers to how the Russian Empire, and later the Soviet Union, used the Russian language for the domination of former colonies, which were later united as satellite socialist republics during the Soviet era. After the fall of the USSR in 1991, this process continued as a ‘de-Russification’ and endures to this day. Insights will be gleaned through the understanding of this phenomenon, both as the subject of study, as well as through a critical revision in artistic and philosophical terms. This will show how the end of one process gives rise to the beginning of another. The process of Russification existed as a political project to expand the influence of the Empire and continues after the fall of the Soviet Union through discourses in the media and elsewhere. Azizov will discuss artworks, critical essays and auto-biographic material based on his research in this area.